



## 二 こいつは春から天狗になる？

---

「君も天狗になれる！いざ、来たれ。クロススポーツ部」

目の前に一枚のチラシが差し込まれた。松崎直人はそのチラシを手に取り、渡された相手の顔を見た。ゴリラだ。いや、人間だからゴリラマンだ。背は高い。直人の頭のとっぺんがゴリラマンの鼻先までしかない。直人の身長が百七十センチだから、相手は百八十センチ以上ある。それに肩幅があり、胸板は厚く、体はがっしりしている。筋骨隆々だ。顔だけでない。体もゴリラだ。それに比べ、松崎はなで肩で、ひょろりとしている。もやしだ。胸板は合板のように薄い。特に、この一年間は、高校受験の勉強のため、ろくに運動もしていない。直人はゴリラマンに圧倒されると同時に、あんな体型になりたいと憧れを抱いた。でも、相手の顔には笑みがない。無表情で、チラシを突き出すだけだ。本当に部活に入ってもらいたいのかどうか疑わしい。単に事務的にやっているようにしか見えない。

ただし、相手は先輩。直人は「ありがとうございます」と礼を言って、チラシを受けとった。ゴリラマンならぬ、クロススポーツ部の先輩は、次々と正門から入ってくる新生に黙々と、無表情のままチラシを配り続けている。あんなんじゃあ、誰も入らないよな。直人チラシを丸めてポケットに突っ込もうとしたが、ふと、気になって、もう一度、チラシを広げた。

「君も天狗になれる！いざ、来たれ。クロススポーツ部」か。天狗とクロススポーツって、どういう関係があるんだろう。頭をひねる。結びつかない。違和感だけが残る。

「まあ、俺には関係ないか」そう呟くと、直人はチラシをポケットに無造作に押し込んだ。

「あなた、一年生？」

昼食を終え、時計を見た。昼休みにはまだ時間がある。クラスメイトたちは、同じ中学から来た者同士が集まって雑談をしている。直人にも同じクラスに同じ中学から入学した奴がいたが、あまり親しくない。教室の中でじっとしていてもつまらない。そうだ。直人は立ち上がった。学校探検と称して、運動場など学校内をうろうろすることにした。

運動場には、ハンドボールやサッカーのゴール、陸上のトラック、テニスコートなどがあつた。施設は多いが、全体的に狭い。それぞれのクラブが同時に練習をすれば、選手同士はぶつかりそうだ。ひと周りをしたところで、ベンチに座った。しばらくすると声を掛けられた。顔を上げると、そこにはひまわりのような明るい笑顔があつた。目が大きく、色が白い。魅力的な女性だ。思わず引き寄せられる。

「ええ」

直人は突然のことであり、また、年上の女性から声を掛けられるので、あがってしまい、そう答えるのが精いっぱいだった。他に言葉は出なかった。

「それで、部活決まった？」

ひまわり娘が直人の隣に座った。直人は緊張して、体をちじこませる。ひまわりの黄色い光が直人の白い頬を照らす。

「いや、まだです」直人は光の方向に顔を向ける。まぶしい。慌てて顔を元に戻す。白い頬が赤く染まる。

「じゃあ、ここに来てみて」女性がチラシを差し出した。

「君も天狗になれる！いざ、来たれ。クロススポーツ部」朝、ゴリラ顔の先輩から渡されたチラシと同じだ。

「このチラシ、持っています」直人はポケットに突っ込んだチラシを思い出した。ゴミ箱に捨てようと思っていたけど忘れていたのだ。皺だらけなのを急いで両手で伸ばす。

「あら、ホント！あいつもちゃんと仕事をしているんだ。じゃあ、決まりね。授業が終わったら、部室に来て。部員を紹介するわ」

知らない間に入部が決まっている。

「いえ。まだ、入部するかどうかは決めていません」

「だって、うちの部のチラシを持っているじゃない。興味がある証拠よ」ひまわり娘は顔に似合わず、強引に話を進める。

「いや、そういう訳じゃないんですけど」直人は相手の勢いに負けて、口ごもるだけだ。

「じゃあ、どういう訳？」うつむく直人の顔の下からひまわりの笑顔が覗いてくる。

「天狗とクロススポーツとの関係がよくわからなくて」

「ああ、そういうことなの」ひまわり娘は顔を元の位置に戻した。

「ほら。スポーツって、基本的に体を動かすことじゃない。それなのに、今のスポーツって、野球やサッカー、陸上って、ジャンルを分け過ぎだと思わない」

「そ、そうですね」確かに、ひまわり娘の言う通りだ。直人は小学生の頃、ドッジボールをやっていた。中学生に進級すると、ドッジボール部はないため、よく似た球技のハンドボールに入部することにした。小学校の友人たちはそれぞれ、野球をやっていた奴は野球部、サッカーをやっていた奴はサッカー部に入部した。その道を究める、その道一筋と言えはよいが、実は、他にやりたいことがなかった、考えなかつただけのことだ。

「だから、あたしたちの部は、そういうスポーツの垣根を取り払って、スポーツをすること自体を楽しむ部にしたの」

「でも、その天狗って、あの天狗ですか」直人の頭の中に、眉はへの字で、目はがぎよろりとして、鼻はなすびを引っ着けたかのように高く、顔全体が赤く、団扇を持って、高下駄を履き、空を飛ぶ天狗の姿が思い出された。

「そうよ。山の中で修業する天狗よ」

「その天狗とクロススポーツってどういう関係があるんですか？」

「そう。天狗のように、平地や山の中を走ったり、山を登ったりするの。まあ、陸上とクロスカントリーと山岳の要素を兼ね備えた部活ね。部員の中には、自転車や水泳もやっている人もいるわ。体を動かすことなら、何をやってもいいの。それは自分で決めるの」

何をやってもいい。自分で決める。その言葉に魅かれた。なんだか面白そうだ。中学生までは、勉強にしろ、部活にしろ、先生や先輩に言われたとおりにやってきた。それから解放される。でも、その反面、何をやっていいのか、少し不安もある。クロススポーツか。だが、直人は走る

のは苦手だ。いや、走ることは苦痛ではない。これまでもハンドボールの練習ではコートを走り続けた。ただ、走るのは早くない。

「僕、走るのが遅いんですけど。大丈夫ですか」

「大丈夫よ。うちの部は短距離じゃなく長距離だし、それに、早さは競わないの。競うのは自分自身とよ」

それならいい。自分のペースなら走ることはできる。でも、天狗と自分とは一致しない。自分の顔はしょうゆ顔だし、色は白いし、体はやせっぽちで、それほど筋肉はついていない。それに、天狗のような顔にはなりたくない、そのことを率直に口に出す。

「僕、天狗の顔にはなりたくないんです」

「あはははは。天狗はあくまでも例えよ。あたしだって天狗の顔になんかなりたくないわ。それとも、あたしの顔が天狗に見える？」

ひまわり娘が直人の顔を再び覗き込む。

「そ、そんなことないです」直人はどぎまぎしてしまう。本当なら、「天狗何かじゃなく、美人です」と続けたいのだが、そんな勇気はなかった。

「天狗はみんなの気を引くためのキャッチフレーズよ。以前は、「君も風になれ」がキャッチフレーズだったの。それだと、「風邪はひきたくないんです」って断われたので、それで変えてみたの。キャッチフレーズの件は、部長に言ってみるわ。でも、天狗の精神だけは残したいわ」

「天狗の精神？」

「そう。それについては入部したら詳しく教えてあげるわ」ひまわり娘が微笑む。ずるい。そんなこと言われたら気になって、入部せざるを得なくなる。

「じゃあ、入部で決まりね」

いやにあっさり入部が決まった。ひまわり娘の笑顔ビームが直人の好奇心に火を着けたのだった。だが、目の前のひまわり娘の笑顔と山の中を走っている姿が結びつかない。そんな直人の気持ちを察してか、

「あたしも最初は、山の中なんて走りたいとは思っていなかったけれど、実際に走ってみると、木々の匂いを嗅いだり、ひっそりと咲く、名も知らない花を見たり、普段聞かないような小鳥の鳴き声を聴くことができ、結構、楽しいものよ。生きているって感じがするの。それに、実用的だけど、知らない間に、体力もつくし、ダイエットになるわよ」

確かに、ひまわり娘の体は、変な意味じゃなく、引き締まっている。そう言えば、朝、校門の前でチラシを配っていた先輩も、顔の良し悪しは置いておいて、体はスマートだった。それに比べて自分は、高校受験のせいもあって、半年以上は運動をしていないせいか、手のてのひらでお腹を十センチ以上掴めることができる。腹筋が腹肉に変わっている。小山状態だ。

「じゃあ。部室で待っているわ」

ひまわり娘はベンチから立つと、次の新入部員を求めて、同級生たちに声を掛け始めた。

「ここか」運動場の隅にコンクリートブロックの建物があった。その一番右端が、クロススポーツ部だった。直人は授業が終わるとチラシの地図を頼りにして、部室を訪れた。部室のドアには

、「クロススポーツ部」と段ボール用紙にマジックで書かれていた。その下に、「陸上部」、山岳部、「トレイルランニング部」と書かれた段ボール用紙が張り付けられていた。なんだ、四つの部の共有か。

「あの一。すいません」直人は部室のドアを開けた。ギー。ドアが開く。中には、机と椅子があり。天井近くにひもが張られ、Tシャツやパンツがぶら下がり、床には、ザックや登山靴、ランニングシューズが散らかっていた。また、壁には、どこかわからない地図が所狭しと貼られていた。

誰もいない。特に、あのひまわり娘がいない。期待していただけにがっかりだ。帰ろう。

直人がドアを閉めようとする、ドンとする音がした。振り向く直人。目の前には、直人よりも一回りも大きい男が立っていた。ゴリラーマンだ。校門でチラシを配っていた先輩だ。

「新入部員か。さあ、入れよ」男は右手を壁についたまま、上から見下ろす。低い声だ。

「は、はい」直人は壁ドンの勢いに負けて、ドアを開け、後ずさりしながら部室に入った。

「そこに座って」

「は、はい」

「これに書いて」

「は、はい」

目の前には、一番上に、クロススポーツ部、そして、かっこして、陸上部・山岳部・トレイルランニング部と書かれた申込書だった。

「まだ、入るつもりじゃないんですけど。それに、六つの部に入部するんですか」

「いいんじゃないか。別に命を取られるわけじゃないんだから。それに、うちは所帯が狭いから、部員はみんな、六つの部を掛け持ちしているんだ。それまあ、掛け持ちと言っても、やることは一緒だけだな。他に水泳や自転車をやっている奴もいる。それも自由だ。さあ、早く、それに名前を書いくれよ」

ひまわり娘と同じことを言っている。ゴリラーマンに促されて、直人は申込書に名前と住所を書いた。

「「まつぎき・なおと」か。いい名前だ。強い選手になるぞ」

何の根拠もなく、ゴリラーマンが呟いた。

「僕、中学の時は、ハンドボール部だったんですけど・・・」

「ああ、いいよ。山岳部やトレイルランニング部は中学ではなかっただろう。それに、俺は、こう見えても、中学の頃は運動部じゃなかったんだ。折角、高校生になったんだ。中学と同じことをやっても進歩がないだろう」

確かに、ゴリラーマンの言う通りだ。高校生になったんだ。中学生の延長ではつまらない。だけど、ゴリラーマンが中学の時に、何もやっていなかったとは信じられない。体の大きさから言えば、柔道やバレーボール、バスケットボールなど、身長を活かせるスポーツをやっていたように見える。それに、そうした部から絶対勧誘されたはずだ。それとも、入部していたけれど、性格が災いして途中でやめさせられたか、それとも自分でやめたのか。自分は自己紹介したけれど、このゴリラーマン先輩の名前は何か。それに気付いたのか、ゴリラーマンがしゃべった。

「ああ。自己紹介が遅れたな。俺は、荒木一郎。二年生だ。後、中山や山田など、部員は全員で五人だ。

「ええ。たった五人ですか」

「たったとは何だ。選りすぐられた五人だ。それに、陸上、山岳、トレイルランニング、水泳、自転車の五種類をやっているから、延べ人数にすれば二十人だ。それに、トレイルランニングの大会では好成績を残しているんだぞ」

「はあ。そうですか」直人は壁を見る。地図の間に表彰状が何枚か貼られていた。優勝。荒木一郎の名前があった。

「これ、先輩ですか」直人は表彰状を指差した。

「そうだ」ゴリラマンがドヤ顔で胸を張った。見かけどおり、山の中の道なき道を力任せに木々をなぎ倒しながら突っ走りそうだ。

「まあ。しばらくしたら他の部員が来るから待っているか。それとも」

「それとも？」

「早速、練習に行くか」

「練習ですか？」

「そうだ。近くに山があるだろう。そこが練習場所だ」

「でも、練習着を持って来ていないんですけど」

「練習着なんかいらんさ。Tシャツとランパンがあればいい。俺のを貸してやる」

荒木の強引さに負けて、直人はTシャツとランパンに着替えた。Tシャツは股関節まで、ランパンはひざまで隠れている。体の大きな荒木にはぴったしかもしれないが、直人には少し大きい。お兄ちゃんのお下がりようだ。

「おっ。よく似合うぞ。それに、山に入ってしまうと、誰にも見られないからな。恥ずかしいことはないぞ」やはり似合っていないのだ。荒木先輩は本当のことを言っている。

「さあ。いくぞ」荒木が部室のドアを開けた。直人はいやいやながらも荒木先輩の背中を追った。